ICCAE2015年度第1回オープンセミナーを開催

●農学国際教育協力研究センター

農学国際教育協力研究センター（ICCAE）は、４月28日(火)、農学部第２会議室において、2015年度第１回オープンセミナーを開催しました。講演者のロエル・スラルタ氏は、現在、フィリピン国立イネ研究所の主任研究員であり、大学院生命農学研究科に日本学術振興会外国人特別研究員として２年間招へいしています。

講演の様子

アジアには、灌漑施設を持たず不安定な降雨に頼ってイネを栽培する天水田が広範に存在し、アジアでのコメ増産を実現するためには、天水田における生産性の向上が鍵です。これまでの研究の多くは、天水田における低生産性の原因を主に土壌水分欠乏に求めてきましたが、最新の研究からは、土壌水分の変動（干ばつと湛水の繰り返し）も大きなストレスであることが示されています。ロエル氏は、このような土壌水ストレス条件下における作物の適応性と生産性維持には、根の可塑性が重要な形質であることを、自身の研究成果をもとに指摘し、今後の研究の方向性について議論しました。

第109回防災アカデミーを開催

●減災連携研究センター

減災連携研究センターは、４月21日(火)、減災館において第109回防災アカデミーを開催しました。今回は建築構造家の金箱温春氏を講師に招き、「建築構造の安全を考える」と題して講演が行われ、一般市民、技術者、学生など88名の参加がありました。

講演では、建築を特徴づける美しさ、機能、経済性などに比べて安全性は一般の人にわかりにくいこと、絶対の安全はなく建物の様々な条件により性能のグレードが異なること、そのうえで安全性は建物にとって最も重要であり、専門家と社会の対話で実現すべきものであることなどが説明されました。また、主体構造に加えて、天井や外壁などの非構造部材も含めた建物全体の安全性の考え方が示され、最後に耐震性が十分でない建物の補強･改修について、最新技術や美しい構造デザインを導入した例が紹介されました。これらを通じて、一般の聴衆にも建築構造の重要性や魅力が伝わっていることが感じられました。

講演する金箱氏

減災館第6回特別企画展を開催

●減災連携研究センター

減災館では、３月４日(水)から４月25日(土)の間、第６回特別企画展「東日本大震災とライフライン復旧・復興の取り組み」を開催しました。４年前の2011年３月11日に、東北の太平洋沖を震源とするマグニチュード9.0の地震が発生し、この地震による津波は東日本の太平洋沿岸地域を襲い、沿岸の街に壊滅的な被害をもたらしました。また、被災地の復旧・復興には、電気・水道・ガスなどのライフラインの復旧が何よりも大切でした。

展示の様子（津波で被害を受けた道路標識）

展示では、ライフラインの復旧・復興に焦点をあて、復旧に要した期間・人員・復旧プロセスを写真・動画・復旧に携わった人へのインタビューなどを通して紹介しました。津波で曲がってしまった道路標識、津波により被害を受けたものの、住民に地域の状況を伝えた石巻日々新聞による壁新聞なども紹介したところ、来館者からは、「テレビでは見たものの、その被害の大きさ、復旧の大変さを実感した」などのコメントが寄せられました。

なお、同特別企画展の実施に際しては、国土交通省、仙台市南蒲生浄化センター、仙台市水道局、石巻ガス、東北ガス、東北電力、NTT ドコモなど、被災地の復旧に尽力する機関・企業等から資料の提供を受けました。